

四十八枚田の
ことだった田毎

「田毎の月」を

田毎の月と
言うからには…

心の風景として描いた芸術家広重

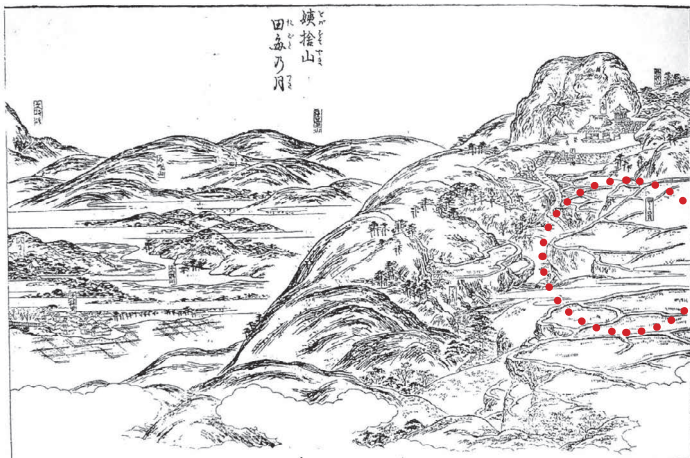
歌川広重の浮世絵「信濃更科田毎月鏡台山」（以下「更科田毎月」、写真左列上）の成り立ちを明らかにした山岸哲さんの論考を読んだり、講演を聞いたりしているうちに一つ気づいたことがあります（論考、講演はさらしなルネサンスのサイトに掲載）。更科娘捨の「田毎の月」という言葉は戦国時代には誕生し、江戸時代になり絵にも描かれるようになりましたが、広重の浮世絵の前に、一つ一つの田に円い月が映る様子を描いたものは見当たらないのです。現代の私たちはいろいろな情報が入り、それぞれの田に満月が映るイメージは不自然ではありませんが、このようなイメージを美しく万人の目に見えるようにしたのが広重の浮世絵で、それゆえに全国に広がったのだと思います。娘捨文学の第一人者矢羽勝幸さんの「娘捨山の文学」「続娘捨山文学」と山岸さんの論考に紹介されている「田毎」という言葉が添えられた絵を時代順に並べました。右の一例が広重が「更科田毎月」を発表する前の時代の絵で、上の3つに限らず、点検できた絵はすべて田の畔が描かれているだけで、月は映っていません。二番目「二十四拝巡拝図会」には「田毎の月」と文字が添えられているのにです。これらの田は現在の「四十八枚田」と呼ばれる棚田の位置に該当します。早い時代に斜面に水路が引かれ、長楽寺に立

ち寄る人がよく目にする棚田だったので「田毎の月」の呼び名の始まりになったとされています。つまり画家にとって「田毎」とは、田毎に映る月という意味よりも、月が田毎に映ることである有名な娘捨の棚田の「四十八枚田」がある所という意識が働いていたと考えられます。これらの絵は更科娘捨がどういう景観の所なのか案内する絵の性格が強いのので、それぞれの田に月を描こうと言う意識がそもそも働かなかったのではないのでしょうか。それにくらべると、広重の「更科田毎月」の田に映る月の描写は芸術的です。山岸さんによると、広重はこの作品の構図を右列最下部の文友昇作「信州更級郡娘捨山十三景図」も参考に成立させたということなのですが、注目はこの絵の棚田にようやく月らしきものが描かれることです。長楽寺下の斜面にある田の区画の中に○の上半分が描かれています。左の鏡台山の峯に円い月があるのでこの月を意識したデザインと考えていいと思います。なぜこの作品では月らしきものが描かれたのか。私は文友昇の絵の版元が江戸の商人であったことが関係していると推測します。「田毎の月」という以上、それぞれの田に月がなければおかしいという発想です。山岸さんによると、文友昇の版元と広重は知り合いの関係にあったはずなので、大胆な図案力を持つ広重は文

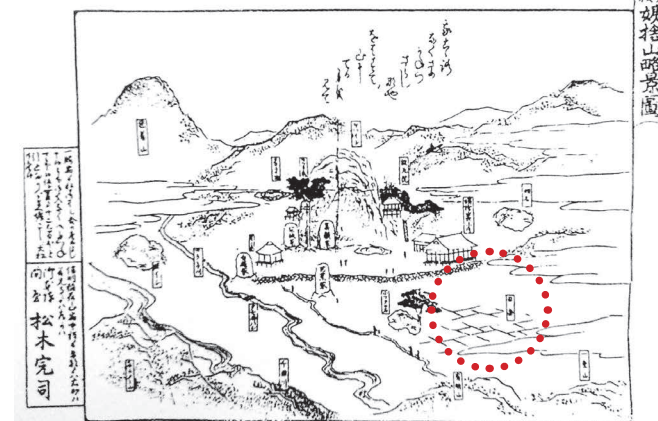
友昇の作品を見て刺激を受け、一つ一つの水色の水張り田に満月を宿らせれば「田毎の月」という言葉から心の中に広がる美の風景が描ける、それは極彩色を施せる浮世絵ならではの表現と思ったのではないのでしょうか。その表現はアートのため、全国に広まったのだと思います。地元人ら実際に棚田を歩いた人は、斜面を上り下りしていると月が自分を追いかけるようにそれぞれの田に映っているのが見えますが、同じ場所から一度にすべての田に月が映る様子は見えないと知っていたのではないのでしょうか。だから広重の「更科田毎月」の前の時代は田に月は描かれなかったかとも考えました。広重は「更科田毎月」発表と同時期に三枚続きの横長の浮世絵「信州更科田毎の月」（左列下）も作っており、この絵では田毎の月は棚田ではなくほぼ平場の田でも見られるように描かれています。田毎の月が大衆化した証拠かもしれません。補足です。1700年代前半に造られた「田毎の月」がデザインの刀鏝が、東京・目白台の永青文庫に伝わっています。肥後熊本藩お抱えの鏝工の作で、田毎に細い三日月のような線があります。早苗か切り株のような描写もあります。熊本は信濃からはるかに遠方なので「月の表現がないと見た人が分からない」と考え、鏝工が描き込んだのかも想像しました。



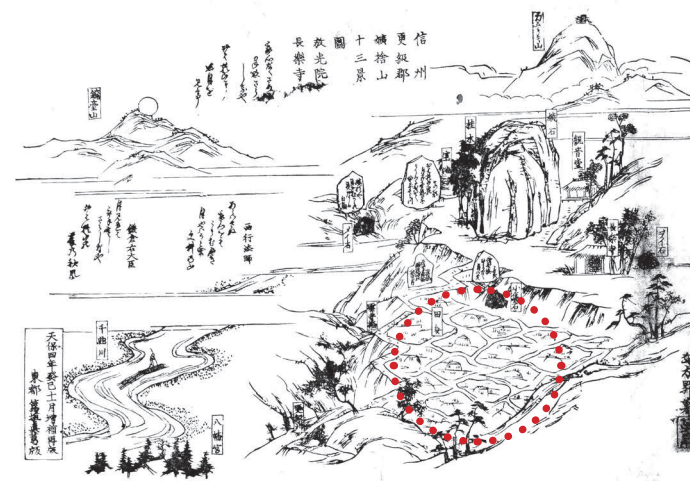
天明7年（1787）中村伯先による「更級娘捨山の古辞」
矢羽勝幸「娘捨山の文学」より



享和3年（1803）「二十四拝巡拝図会」の娘捨山田毎乃月
矢羽勝幸「続娘捨山の文学」より



文政年間（1818～1830）「更級娘捨山略景図」
矢羽勝幸「続娘捨山の文学」より



天保4年（1833）文友昇「信州更級郡娘捨山十三景図」



嘉永6年（1853）歌川広重「信濃更科田毎月鏡台山」 千曲市教育委員会蔵



嘉永6年（1853）歌川広重「信州更科田毎の月」 国立国会図書館蔵